



Title	アドルノ美学のアクチュアリティ : 『美学理論』刊 行後五〇年を経て
Author(s)	原, 千史
Citation	形象. 2023, 5, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92247
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集論文

アドルノ美学のアクチュアリティ

——『美学理論』刊行後五〇年を経て

一九六八年夏にアドルノが急逝してわずか二年後、『アドルノ著作集』の劈頭の巻として『美学理論』が刊行されてから早くも半世紀以上の歳月を閲した。周知のように膨大な遺稿から著作集の編者らが編纂して成立したこの著作は、アドルノ自らが生前に刊行したものではない。近年では文献学的な研究が進行しており、テキスト批判を経て新たな視点で編集した版が刊行されつつある。この著作をめぐっては、この半世紀の間に様々な論者が独自の視点から解釈を展開してきており、今後もお新たに編集された版の刊行とともに従来とは異なる側面が発見される多面性をもった重要な美学上のテキストであり続けるであろう。二〇二二年三月一日にオンラインで開催された第一六回形象論研究会では、新進気鋭の若きアドルノ研究者たちを招き、アドルノ美学について斬新な視点から非常に示唆に富む研究成果を発表して頂いた。本特集にその成果を寄稿してくださった府川純一郎氏と守博紀氏には、今回の研究会を企画した者として深く感謝申し上げる次第である。

今回の特集ではアドルノ美学に関する従来の研究では好んで取り上げられてきた芸術の自律と社会批判といったテーマではなく、アドルノ美学における崇高概念の位置づけや音楽言語論を基に世界と自己の理解に資する芸術経験のありようについて論じられており、いずれも従来にはない視点からアドルノ美学にアプローチしている。府川氏の論考では、崇高概念における「大きさ」の契機に着目して、アドルノ美学においてはカントの崇高理解と相反して自己同一的な理性を解体して自然への想起がなされる重要な契機として捉え直している。その自然への想起こそが「第二の自然」に絡め取られた人間の自然存在としての側面を再認識させるのである。守氏の論考ではアドルノの音楽言語論に言及する前にベンヤミンから継承した「名前」を巡る議論に触れて、名指すという行為に自己と世界の関係を深化させる意義を見出す。そして名前そのものを名指す試みとしての音楽と単に意味内容を伝達するだけではない遂行としての言語の構想とを結びつけている。

〔原 千史〕